

全国厚板シヤリング工業組合

切板の需要動向

(H 2 2 . 6 . 1 6)

1. 切断量の推移

(単位:千トン)

項目	21年度				22年度	
	1Q	2Q	3Q	4Q	1Q	2Q
	(実績)	(実績)	(実績)	(実績)	(事務局想定)	(事務局想定)
無規格	53 (2)	40 (1)	51 (1)	54 (2)	50 (1)	30 (1)
規 格	382 (65)	375 (99)	417 (116)	414 (115)	420 (111)	410 (111)
合計	435 (67)	415 (100)	468 (117)	468 (117)	470 (112)	440 (112)

(出所)・実績は全国厚板シヤリング工業組合「鋼板流通調査」結果による。

・カッコ内の数値は賃加工量で内数。

【コメント】

■ 4Qの切断量(実績)は、前年比4.0%減の468千トン(前回の想定値は440千トン)。

■ この結果、21年度計は、前年度比26.7%減の1776千トン。過去最低のレベル。

【参考】18年度:2586千トン(同+2.7%)、19年度:2526千トン(同▲2.3%)、
20年度:2425千トン(同▲4.0%)

■ 切断量(成品切板出荷+賃加工)の前年同期比の推移:

20年度1Q:+6.3%、2Q:+6.6%、3Q:▲3.3%、同4Q:▲24.8%、

21年度1Q:▲34.1%、2Q:▲37.9%、3Q:▲25.0%、4Q:▲4.0%。

■ 22年度1Q(想定)は、470千トン程度(前期比+0.4%、前年比+8.0%)と想定。

・4月167千トン+5月157千トン(速)+6月150千トン(推)÷470千トン

■ 22年度2Q(想定)は、440千トン程度(前期比▲6.4%、前年比+8.4%)と想定。

2. 業 況

厚板シヤ業界の状況を概観すると、建産機関連需要は、アジア向けの輸出回復を背景にユーザー段階の製品在庫調整が順調に進展するなど、漸く底を脱し回復傾向に転じており、生産レベルもピーク(2008年)比60%程度まで戻ってきている。しかし、切板需要の過半を占める建設関連需要は、中小建築及び橋梁の落ち込みが長期化する中、切板ニーズの高い大型建築案件も端境期に入っていることから、全体的に不振を極めている。先行きについても、鉄骨建築は、大型案件を中心に7月以降回復し最悪期を脱するとみられるが、先細り傾向にある橋梁は、公共投資の抑制により、年間を通して冷え込んだまま推移すると予想され、先行き不透明感が一段と強まっている。

こうした状況を反映して、切板需給は縮小の一途をたどっている。昨年の春先以降は、積み上がった在庫の削減努力を懸命に続け、その結果、足元の在庫量はほぼ適正水準まで減少した。このように在庫調整は一定の成果を上げたものの、依然仕入れ・出荷ともに縮減傾向にあり、切板市場には一向に復調の兆しが見えない。

このため、全国各地のシャーからは、「夏以降のファブの仕事はほとんどなく、安値競争が激化している」、「母材価格が上昇する中、ユーザーの値下げ要求が強く、採算が全く取れない」、「中小シャーの稼働は30～40%程度、与信問題など不安材料もあって心理的にかなり追い込まれている」、「最近、建築案件に外材を使う事例が増えている」、「必要な値上げ、価格転嫁進まず、シャーの体力は相当消耗している」、「仕事がなく、取り合い・叩き合いが激しく、殺伐とした雰囲気」、「ひも付き交渉が決着せず、転嫁困難」、等の意見が出され、3か月前に比べて、現状を憂慮する、悲痛な声が一段と拡がっている。

参考までに、当組合が実施している月次調査により、平成21年度を顧みると、「出荷量」は208万トン（前年比▲32%、96万トン減）、「受入量」は186万トン（前年比▲41%、130万トン減）とそれぞれ激減し、過去最低量に落ち込んだ。

受入量が出荷量を下回った結果、21年3月末に55万トンまで積み上がった在庫量は、3月末には33万トンとなり、1年間で22万トン削減された。

在庫率についても、21年4月末（295%）をピークに、逐月低下傾向を辿り、22年3月末は170%、4月末188%と、適正レベル（150～200%）まで低下した。

シャー各社の経営環境は、需要回復の展望が見えないまま、一段と深刻化している。

雇用問題、資金繰り問題、与信不安がさらに強まる中、母材のスケジュール値上げへの対応に迫られ、その転嫁が進まず、先行き憂慮すべき事態がさらに拡大している。シャーとして夏場以降も、「仕事なき材料値上げ」の窮状をどう凌ぎ、体力の消耗をいかに食い止めるかが、最大の課題である。

次に、需要動向を概観すると、

(1) 建産機部門は、内需は相変わらず回復力に乏しいが、旺盛な新興国需要に牽引された輸出回復により、限定的とはいえ受注に明るさが見え始めてきた。リーマンショック以降、各シャーは生産能力を大幅に削減したことから、足元の需要回復で稼働率としてもかなり高い水準まで戻りつつある。

4月の建設機械の出荷額は、昨年の著しい落ち込みの反動もあって、4ヵ月連続の増加となった。増産機種も、これまでショベル系のみであったが、数ヵ月遅れで他機種にも拡大してきている。しかし重電は、これまでの堅調から一変し、22年度上期は低迷が続くそう。下期以降に期待したいが、原発以外は受注自体が減少しており、また需要家の海外調達により国内生産に繋がらないケースも増えている。

一方需要家は、為替リスクの回避やコスト削減から、海外調達・生産の海外シフトを一

層強化する傾向にある。これに伴う空洞化による市場の縮小や原価低減要求への対応は、シャーパーにとって生き残りをかけた喫緊の課題となっている。

(2) 建設分野については、まず橋梁は、21年度の入札量が30万トン（前年度比40%減）まで減少したことや、補正予算の執行遅延等により、ファブの受注量は激減した。このためシャーパー切断量も足元、過去最低の水準まで落ち込んでいる。

また、22年度の工事入札量についても、当初、20万トン程度と見込まれていたが、その後、30万トン弱まで上方修正する見方も出たが、新政権誕生により再び不透明化している。新規案件の入札は、7月ごろから出てくるものとみられるが、生産時期は年末から年度末であり、シャーパーの仕事量も足元から年末にかけて、極めて低いレベルで推移するとみられる。

一方、首都圏の超高層建築案件は、これまでのところ中止延期等大きな計画変更もなく、高水準を維持しており、1月頃から工事が本格化している。但し、現在は地下部工事が中心であり、鋼材所要の多い地上部が立ち上がるまでは大手ファブにとっては端境期となっている。回復は7月頃以降とみられ、ファブの仕事は向こう半年から1年間程度は高水準が続くと見込まれている。

また、高炉メーカーの大幅値上げの影響により、ゼネコンの輸入鉄骨シフトが再び活発化しており、予断を許さない状況にある。

また、全国各地域とも期待の建築案件が動き出しているものの、実感に乏しく、相変わらずコストダウン要求に苦慮している状況が続いている。

(3) 一般店売り分野については、設備投資関連や中小商業ビル等は、平成20年度下期以降ストップしたままであり、中小ファブの手持ち量は惨憺たる状況にある。シャーパーの稼働も50%以下の低操業を余儀なくされている。各地区とも荷動きが低調（とくに高炉材の荷動きが悪い）で、改善の兆しが見えない。市場では、一物多価の様相を呈しており、仕入れ・販売ともに極めて厳しい状況が続いている。

一方、母材供給面をみると、メーカー・ロールは、外需の増大を主因に需給が急速に引き締まり、極めてタイトな状況が続いている。また、メーカー各社の相次ぐ設備休止入りが伝えられおり、先行き更なる納期遅延への危惧が強まっている。

内需減退、切板市況の低迷といった状況が長期化する中、シャーパー各社は、赤字経営を余儀なくされている。こうした状況下、今年度入り後、母材価格の大幅なスケジュール値上げが実施されているが、全国各地の店売りマーケットにおいては、価格転嫁交渉が難航している。逆に需要家からの激しい値引き要求に晒されており、成約もままならない状況が続いている。メーカーと需要家の板挟みでシャーパー業界は苦悩している。

なお、シャア業界の当面する主要課題を列記すると、以下の通りである。

- ①母材のスケジュール値上げへの対応
- ②適正加工賃の確保
- ③雇用問題（助成金の申請、臨時休業、操業短縮等）
- ④資金繰り、与信管理
- ⑤コンプライアンス対応（品質証明、独禁法、輸送条件問題、等）。

※品質証明問題については、20年3月以来取り組んできたが、その成果として、昨年12月に、「建築構造用鋼材の品質証明ガイドライン」がまとめられ、以降、FAB・関係団体と実行方策について協議中。

- ⑥建築分野におけるコンクリート、及び海外FABとの競合問題

3. 足元の主要需要部門の動き

(1) 橋梁・建築鉄骨の動向

【全 体】

橋梁の低迷と鉄骨の急減により、シャア各社の稼働率は大幅に低下している。社によって差はあるが、臨時休業やシフト変更で何とか凌いでいる状況。在庫は過去3年間で最低レベルまで減少したが、需要の急減から在庫率はむしろ上昇している。

今後の動向は、橋梁が年内は惨憺たる状況が続く見通しであり、7月以降鉄骨が復活しても、年末頃までは極めて厳しい稼働・採算状況が続く見込み。

【橋 梁】

21年度の入札量が30万トン（前年比40%減）となったことや、補正予算の執行遅延による入札遅れから、各ファブとも受注が激減した。物件の前倒しもあったが、21年度4Qの切板数量は、例年に比し極めて低いレベルとなった。更に、足元4～5月の数量は、前倒しの反動もあって、過去最低レベルまで落ち込んだ。

22年度の入札量は、当初、過去最低の20万トン程度と見込まれていたが、21年度末時点では30万トン弱まで戻るとの見方が出された。しかし新政権誕生により、再び不透明な状況となっている。関東各ファブは、21年度下期入札であまり入札できておらず、盆前後までの線表がほとんど伸びていない。従って、各ファブとも案件の繰り上げや鉄骨へのシフトで稼働を維持している。新規案件の入札は、中部地方整備局の案件をはじめ7月頃から出てくるものの、生産は年末～年度末であり、シャアの生産も、足元から年内にかけ、極めて低いレベルで推移するとみられる。

【鉄 骨】

設備投資関連や中小建築案件の中止により、中小ファブの稼働は惨憺たる状況にある。

一方、首都圏の大型案件は、今のところ大きな計画変更もなく、Sファブ対象案件は高水準を維持しており、今年1月頃から工事が本格化している。但し、地下部が中心であり、鋼

材所要の多い地上部が立ち上がるまでは端境期となっており、とくに1～3月はSファブの一部も臨時休業を取らざるを得ない状況であり、切板数量も極めて低いレベルとなった。

今後、地上部が本格化するのは7月以降とみられ、ファブの仕事量は、向こう半年～1年間程度は高水準が続く見込みである。

しかし、足元の仕込み案件が全く動いていないため、今の山が過ぎた後は、再び低水準に陥る可能性がある。

また、高炉メーカーの大幅値上げの影響から、輸入鉄骨シフトが再び活発化している。ゼネコンは、一時品質面と国内価格の値下がりから輸入鉄骨にメリットなしとの見方をしていたが、ここへきて輸入鉄骨の使用を再開している。国内鋼材使用量の減少につながる懸念があり、今後の動向を注視する必要がある。

(2) 建産機・重電・金属工作機械の動向

【全体】

内需は相変わらず回復力に乏しいが、旺盛な新興国需要に牽引された輸出の回復で限定的とはいえ受注に明るさが見え始めている。リーマンショック以降、各シャーは生産能力を一気に落としており、この回復で稼働率としてはかなり高い水準まで戻りつつある。

一方で需要家は、為替のリスク回避やコスト削減から、海外調達・生産の海外シフトを一層強化する傾向にある。これに伴う、空洞化による市場の縮小と原価低減要求は、我々シャーにとって今後の生き残り策構築が喫緊の課題となっている。

【建設機械】

建設機械の4月出荷額（日本建設機械工業会調査）は、前年比+64.5%で4ヵ月連続増。昨年の低迷からの反動で、当然の結果と言えるが、増産機種がショベル系単独だった現象が数ヵ月遅れで他機種に拡大していることは明るい展開といえる。

油圧ショベル

外需は、新興国向け輸出が好調、内需は中古機械市場の活性化と排ガス規制対策の買換えで内外とも増加。シャーの受注は概ねピーク時の60%程度まで回復。

建設用クレーン

ショベルの回復から3ヵ月程度遅れての回復であるが、足元の受注はピーク時の45%前後とみられる。クローラクレーンの低迷が長期化しているが、ラフテレーンクレーンは買換え需要や中近東・ロシア向け輸出案件が増加しており、09年下期以降生産は漸増傾向。

鉱山機械

世界的な資源需要回復から鉱山機械の輸出は急回復。特にインドネシア・ベトナム向けは極めて堅調。鉱山用ダンプ・大型ショベル・ホイールローダは、ピーク時の60%の生産水準まで回復している。

【板金・鍛圧機械】

板金機械は、輸出増で、本年1月以降受注が急回復。4～6はピーク時の60%まで回復の見込み。

プレス機械は、小型・中型機を中心に回復基調にあるものの、自動車向けの大型プレスは、回復の実感を持つまでには暫く時間を要すると思われる。プレス機械全般では、4月の受注はピーク時の約45%となっている。

【重電】

重電は、これまでの堅調さから一変し、10年度上期は低迷が続きそう。下期以降に期待したいが、原発以外は受注自体が減少しており、また需要家の海外調達により国内生産に繋がらないケースも増えている。産業用モーターも生産計画は漸減傾向にあり、この分野も為替の影響を受けている模様。

【産機店売り】

産機店売りでは、建機向けハイテンの受注が増加しているものの、その他内需中心の分野では、5月以降は前回報告時より一段と悪化している。値上げ前の先行手配が一段落したことや、設備投資抑制など内需縮小の影響が大きいと考えられる。また素材価格値上げの転嫁交渉も非常に難航しており、受注減との二重苦の深刻な状態に危機感を抱いている。

【参考】 成品切板の最終用途比率（平成21年3月出荷分。厚板シャワー工組調べ）

・ 建 築 用 :	37%
・ 土 木 用 (橋梁、鉄塔等) :	17%
・ 建産機用 :	26%
・ 輸送機用 (船舶、自動車) :	8%
・ 重電用 :	2%
・ その他 (鉄道車両、容器、二次製品)	10%

全国厚板シヤリング工業組合

シヤ業の厚中板在庫推移

(H 2 2 . 6 . 1 6)

組合員の厚中板在庫推移(167社・6事業所／自社所有分)

(単位:千トン)

項 目	21/6月末	9月末	12月末	22/3末	6月末	9月末
	(実績)	(実績)	(実績)	(実績)	(事務局想定)	(事務局想定)
在 庫 量	500	406	365	328	300	290
前期比/量	▲51	▲94	▲41	▲37	▲28	▲10
前期比/%	90.7	81.2	89.9	89.9	91.5	96.7

【コメント】

■在庫量は、21年3月末(551千トン)をピークに漸減傾向をたどり、22年4月末は327千トンで、ピークに比べて224千トンの削減が図られた。

■一方、在庫率は、需要低迷下、22年1月末(227%)まで足踏み状態が続いたが、2月末(197%)以降順調に改善が進み、3月末170%、4月末188%と、適正在庫率(200%以下)の範囲内で推移している。

■現下の需要不振がいつまで続くか不透明であるが、今後もメーカーへの慎重な申込み姿勢が維持され、メーカー・ロールの制約が更に強まるものと想定すると、6月末在庫は300千トン程度に、9月末は290千トン程度まで減少するもの見込まれる。

仮に、今後、月間の出荷量が16～17万トン程度で推移した場合、6月末在庫率は176～188%、9月末は171～181%程度と推計され、適正レベル内で推移すると予想される

当分の間需要低迷が続くと思われるので、今後も在庫管理に細心の注意が必要である。

。

以 上